

三重 お産が最も安全な県に

三重大学 医学部など 医療機関の連携奏功



三重大学医学部の池田智明教授



県内医療機関がビデオ会議でカンファレンスを実施している

周産期死亡数とは、妊娠22週以降の死産と生後7日未満の新生児の死亡数を合わせたもの。千人当たりの死亡数を示したものが周産

19年周産期死亡率全国最低の2.0

三重県は、出産前後に死亡した胎児や新生児の割合を示す「周産期死亡率」で2019年に全国47都道府県で最も低い2.0(厚生労働省の人口動態調査、全国平均3.4)を記録した。16年には5.7と、全国でもっとも高かったが、三重大学医学部付属病院を中心に、県内医療機関が連携を深化させたことで、大幅な改善につながった。

(津・川原和起)

期死亡率となる。

取り組みの中心となったのは、三重大学医学部の池田智明教授だ。池田教授は、就任した11年から、分娩施設へのベッド数や機材の拡充に取り組んだ。12年からは、県内の他医療機関とビデオ会議を開始。16年からは毎

妊娠をリスクで「棲み分け」

に変わる。その場合も周産期医療センターがすぐに引き受けられるように態勢を整えた(池田教授)。

その逆も同様で、切迫早産で管理していた妊婦が満期産近くとなり、ローリスクに切り替われば、1次分娩施設に送るように呼び掛けた。

その他、教育や研究面でも対策を講じていることで、三重県の周産期死亡率は17年、18年と徐々に改善し、19年には全国で最もお産が安全な県となった。池田教授は「この結果を維持することで、少子化や人口減少の解消にもつながる。分娩だけでなく、その後の育児まで、母子ともに健康でハッピーになれる県にしていければ」とさらなる改善に意欲を見せている。

ヘルスケア&マネジメント

朝実施しており、患者の容体の変化や、対応方法などについて意見交換をしている。お互いの情報共有に加え、緊急時の連携の深化も目的だ。

16年から特に力を入れたのが「ハイリスク妊娠とローリスク妊娠の棲み分け」だ。リスクが高い分娩は、

三重大学付属病院など、施設が充実する周産期医療センターが担う。リスクの低い出産は、地域のクリニックなど1次分娩施設に任せるように徹底した。「ローリスク妊娠といっても、出血などで約2割はハイリスク